

「令和4年度の活動を振り返って ～研究助成の復活に想う～」

会長 神林 勲（北海道教育大学札幌校）



本学会の令和4年度が間もなく終了致します。この1年間も役員・会員の皆様のご協力とお力添えにより、予定の事業を滞りなく終了できそうです(2/1現在)。改めまして、皆様のご尽力に感謝いたします。

さて、令和5年度より、長らく休眠しておりました研究助成を復活させることになりました。すでにHPやメーリングリストではご案内の文書をお示しております。若手研究者、学校教育現場や地域社会で運動・スポーツに携わっていらっしゃる会員の皆様の研究を少しでも支援できればと考えております。奮ってご応募を頂ければ幸いです。

思い返せば私も過去に本学会の研究助成にお世話になった人間です。岩見沢校に勤務していた時代、多くの大学院生を研究室に抱えておりました。院生達の研究に何度か助成を頂き、とても助かった記憶があります。ただ、今回、研究助成がスタートするものの、自身が指導する修士課程の院生が遂にいなくなりました(最後の院生がこの3月に修了する予定です)。研究助成に応募したり、お世話になったりすることがないかもしれないと思うと、一抹の寂しさを感じます。

最後になりますが、今年度、ほぼ通常通りの学会大会を開催して頂きました東海大学札幌キャンパスの先生方のご尽力に改めてお礼申し上げます。令和5年度の学会大会は、歴史上初となる藤女子大学(花川キャンパス)での開催です。皆様のご参加と活発な研究活動の場となることを期待したいと思います。

「任期3年目を迎えるにあたって」

理事長 石澤 伸弘（北海道教育大学札幌校）



理事長の任期の最終年度を迎えようとしております。思い起こせば、昨年度の60回記念大会と今年度の61回大会は対面での開催ができ、コロナ前の流れに少しずつ近づいて参りました。

学会が創設されてから70有余年が経過し、学会大会も60回の開催を控えた中でコロナ禍に見舞われましたが、学会の次なる大きな節目に向けて、歩みを進めて行く事が求められます。

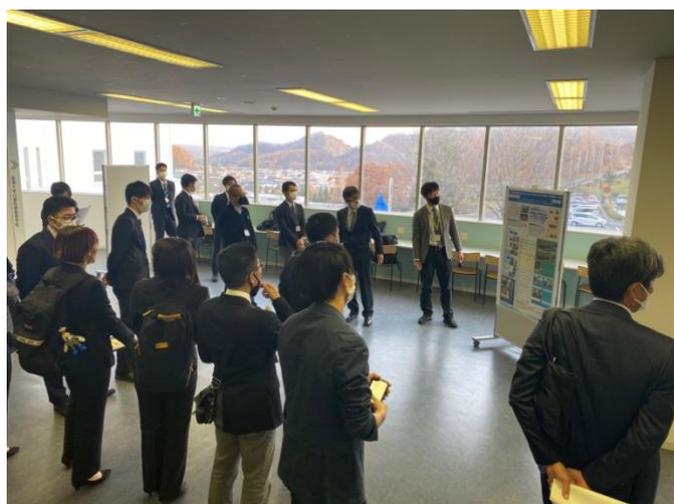
今年度より装いも新たに、「研究発表会」がスタートし、2022年5月22日に第1回大会が行われました。また、次年度より久方ぶりに「研究助成」も再開されることが決定しました。研究助成再開に向けての議論の中で、その目的が、「北海道における体育・スポーツ科学研究の活性化と道民のスポーツライフの充実に寄与すること」であることを再認識致しました。

これらの点を踏まえ、会員の皆さま方におかれましては、本学会の活動に際しまして変わらずのご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

写真で振り返る「北海道体育学会第 61 回大会」



今年度の学会大会は東海大学札幌キャンパスを会場として開催されました。



ポスター発表の様子



ポスター発表の様子



総会の様子



若手賞授与の様子

北海道体育学会第 61 回大会 傍聴記

福家 健宗（北海道医療大学）

2022年11月12日（土）、13日（日）の2日間、東海大学札幌キャンパスにおいて、第61回北海道体育学会が開催された。3年ぶりの完全対面開催となった今回は、口頭発表15演題、ポスター発表5演題の発表があった。



会場の様子

運動のパフォーマンスやトレーニングに関しては、嶋森先生（酪農学園大学）からレジスタンス運動における糖質溶液マウスリンスの効果について、池永先生（酪農学園大学）から運動前の糖質溶液摂取により生じる運動誘発性低血糖における月経周期の影響について、山崎先生（酪農学園大学）からレジスタンス運動におけるセット間の休息が総反復回数にもたらす影響について、工藤先生（北海道教育大学旭川校）から練習制限下での野球競技者の複合トレーニングがスプリント能力に及ぼす影響について、土橋先生（北海道教育大学旭川校）から自発的過換気と低酸素の組合せが高強度運動と回復時の呼吸代謝・循環応答に及ぼす影響について、村山先生（北海道教育大学大学院）から性別違和感を抱える人のレジスタンストレーニングが心理面に与える影響について、大森先生（新潟医療福祉大学）からマラソンタイムの個人内変動における性差の影響について、山本先生（北海道教育大学釧路校）から子どもの“やろうとしたのにやらない”現象の発生運動学的考察について、小松先生（心・體・智研究所）からヒト膝関節伸展筋群の形態的特徴について、小林先生（札幌国際大学）から握力で測る最大筋力と筋力発揮調整能と RFD の関係についてご発表があ

った。山崎先生のご研究は、実験デザインの独創性と、現場応用に向けて頑健で意義深い結果を理由として、若手賞に選定された。総じて、現場での実現可能性や運動実施者の特性を意識した研究が多く、質疑でも関心を集めた点であった。目的とした効果を効率よく得るための運動条件や実施者特性の影響についての詳細な検討が今後も盛んに行われると考える。

体育科教育や子どもの運動・健康に関しては、孫先生（北海道大学大学院）から1960年代の体育科教育研究の具体的様相について、近藤先生（北海道教育大学教職大学院）からネット型球技の体育授業での話し合い活動と身体活動量の関係について、北條先生（北海道教育大学教職大学院）から中学校体育授業におけるHSP傾向の生徒の実態について、安田先生（札幌国際大学）から集中講義形式による水泳授業の実践について、苫米地先生（札幌聖心女子学院）からコンテンポラリーダンスの表現のSCAT分析による考察について、河本先生（北海道教育大学附属札幌小学校）から体育授業における教師の視線と教師行動の関係について、清野先生（桃山学院教育大学）から知的障害特別支援学校の体育授業における自由組手を中心とした空手道の実践について、高瀬先生（北海道教育大学旭川校）から極小規模保育所における幼児の基本的な動作の種類と出現頻度について、竹田先生（北海道札幌西高等学校）から高校部活動の運動部・文化部・未加入の違いによるレジリエンスの特徴について、木本先生（藤女子大学）から子どもの社会的時差ぼけと起床時体温・自律神経活動との関係についてご発表があった。自然科学、人文・社会学の分野の垣根を越えて新しい視点を提供する質疑も行われた。異なるアプローチを用いる研究者が一堂に会して議論を交わせる本学会の特長を再確認できた。

学会員数は減少傾向にあり、コロナ禍の影響以降、発表演題数もまだ十分に回復していないとのことであった。困難な時期があったからこそ、今回、対面で議論を交わす学会の意義が改めて確認されたことであろう。これから学会の盛り上がり「超回復」することを祈念し、少しでも貢献できればと考える。

「若手研究者賞を受賞して」

山崎 祐太 (酪農学園大学)

若手研究者賞を受賞することができ、大変嬉しく思っております。選考して下さった委員の先生方に厚く御礼申し上げます。また、本研究を進めるにあたりご指導いただいた山口、柴田両先生、一緒に研究を実施した嶋森先輩、共同研究者の先生方、実験に協力して下さった被験者の方々のおかげで賞をいただくことができました。有難うございました。

北海道体育学会第 61 回大会で発表した「レジスタンス運動のセット間の休息の相違が総反復回数に及ぼす影響」はレジスタンス運動中のセット間の休息時間に着目した研究です。ガイドラインではセット間の休息時間を 2~5 分とすることが推奨されていますが、レジスタンス運動中の主なエネルギー供給源であるクレアチンリン酸の十分な回復のためには 8 分間の休息が必要とされています。従って、休息時間を 8 分確保することによって総反復回数が増大するのではないかと考えました。ただ、セット間の休息時間を 8 分確保するとトレーニングの時間が冗長となってしまいます。複数種目を実施する場合は尚更です。そこで、異なる筋群を動員する 2 種目を 4 分の休息時間をとりながら交互に実施することで各種目のセット間の休息時間を 8 分確保すれば、1 種目ずつ 8 分の休息時間で行う方法の半分の所要時間で同等の総反復回数を実施可能なのではないかと考えました。



本研究の結果、セット間の休息時間を 4 分間とした条件と比較して 8 分間とした条件においてベンチプレスおよびスクワット各 5 セットの総反復回数が増大し、両種目間に 4 分間の休息をおいて交互に実施した条件においてもスクワットの総反復回数が増大しました。よって、総反復回数を高めるためにはセット間に 8 分の休息時間を確保することが有効であること、2 種目を交互に実施することで時間効率を高められることが明らかとなりました。

今後も、4 月から進学予定の大学院において、本研究の課題も踏まえて研究を行い、新たな知見を見出せるように努めて参ります。どうか引き続き、ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

学会大会実行委員報告

大会実行委員長 山田 秀樹 (東海大学)

令和 4 年度北海道体育学会第 61 回大会は、2022 年 11 月 12 日 (土)・13 日 (日) に東海大学札幌キャンパスにおいて面接型大会として無事終了しましたことを、役員・学会事務局および参加された方々に厚く御礼申し上げます。口頭発表 15 演題、ポスター発表 5 演題、参加者は 60 名でした。

東海大学札幌キャンパスでの開催は、北海道東海大学時代の平成 18 年第 46 回大会から 16 年振りとなりました。コロナ禍の完全収束には至っていませんでしたが、

感染対策を十分に取り、従来の大会形式に戻せたことは大変嬉しく思っています。やはり、対面での研究発表および質疑応答は、有意義であり大変盛り上がりました。懇親会については、大人数での会食を避けるために、開催を断念せざるを得なかったことが残念でなりません。次回大会では、参加者のみなさまと楽しい交流ができることを願っております。

本大会の教育講演は、「スポーツと文化を地域に伝える～スポーツ&カルチャーの実践を通じた試み～」と題し

て、本田一輝様 (株式会社セブンスギア/フットサルスタジアム蹴)に講師をお願いいたしました。しかし、残念ながら本田様が当日体調不良のため、後日、ビデオを撮影してYouTube限定公開とさせていただきました。講演の中で、スポーツと地域活性について、大学との連携をご提案いただきました。是非、実現したいと考えておりま

す。

最後になりますが、開催校の東海大学札幌キャンパスの先生方には、多大なご助力をいただきましたことを心より感謝申し上げます、大会報告とさせていただきます。



東海大学札幌キャンパスの大会実行委員会メンバー

研究委員会活動報告

研究委員長 中島 寿宏 (北海道教育大学札幌校)

今年度、東海大学で開催されました北海道体育学会第61回学会大会では、口頭発表15題とポスター発表5題の発表をいただきました。コロナ禍が続く状況ではありますが、昨年度に引き続いて今年度も対面での発表となりました。感染防止対策など大変な中で会場のご準備いただいた東海大学の先生方および学生たちには感謝申し上げます。口頭発表とポスター発表のどちらも対面での発表となったことで、フロアでの質問やコメントが多く出ていると感じます。

また、若手研究者賞には8題のエントリーがありました。厳正な審査の結果、山崎祐太氏(発表演題:レジスタンス運動のセット間の休息の相違が総反復回数に及ぼす影響)が受賞されました。授賞理由は、研究の頑健性や結果の意義が認められる研究であること、レジスタンス運動の効果を高めつつ時間効率も高める方法を示唆する興味深い研究であること、レジスタンス運動の効率を正に「科学的」に追求している有益な研究といえることなどが挙げられました。若手研究者として今後のさらなる活躍が期待されます。今回受賞を逃した方々におかれ

ましても、ぜひこれからも地道な研究を継続していただければと思います。

さらに、今年度は新たな企画として第1回研究発表会を5月22日(日)にオンライン開催で実施いたしました。発表数は8題(研究発表4件、話題提供発表4件)、参加者数は31名でした。ご多忙の中、ご参加を頂きました会員の皆様には、心より感謝申し上げます。来年度には第2回研究発表会が計画されていますので、ぜひ次回もご発表・ご参加いただけるようお願いいたします。



若手研究者賞受賞者・山崎祐太氏の発表

編集委員会活動報告

編集委員長 山口 太一 (酪農学園大学)

本委員会委員長2年目も何もできないまま終わろうとしています。

前号で最重要課題として掲げた学校現場の先生方の貴重なデータを北海道体育学研究に報告するための仕組みづくりについては、委員会で揉んでいただいたものの、全く形にできておりません。現場の先生方、申し訳ございません。

また、新たに事務局より、電子投稿システムの導入の検討という課題をいただきました。電子投稿システムは多くの学会誌で導入されており、著者、査読者、編集担当者にとって便利なシステムです。ただ、現状、北海道体育学研究の投稿締め切りは年度末のみで、投稿数は10編前後と限られています。今後も投稿時期に変更なく、投稿数が増えないのであれば、これまで通り査読者選定のための編集委員会を一度開催して、著者と査読者とのやり取りをeメールで行えば、編集作業は滞りなく進められるように思います。委員の先生方にはコーディネー

タ役として大変お手数をおかけしているのですが、電子投稿システム導入の費用対効果を考えると今のままでも良いのかもしれませんが。

唯一、今年度も委員長としてできたことは、委員会が毎年度必ずやるべきこと、すなわち、北海道体育学研究第57巻の発刊のみです。編集作業は、他の委員の先生方、著者や査読者の先生方、北海道リハビリの山本さんのお力添えのおかげで滞りなく進められました。皆さま、本当に有難うございました。第57巻には、原著論文1編、研究ノート5編、実践研究2編の計8編が掲載されています。どの論文も興味深いものばかりですので、是非ともお目通し願います。

第58巻への投稿も2023年3月末を締め切りとして募集しております。実はすでに投稿があり、その他にも投稿を考えているという嬉しい連絡もいただいております。さらに多くの方からの投稿をお待ち申し上げます。

広報委員会活動報告

広報委員長 森田 憲輝 (北海道教育大学岩見沢校)

広報委員としての2年目が終わろうとしています。2023年1月下旬になってやっと少しコロナ禍にも落ち着きが見えてきたように感じっていますが、みなさんはどうでしょうか。今回、広報委員として2回目のニュースレターの作成にあたって、今年度の学会大会が対面で開催されたことをとても喜ばしく感じています。特にポスター発表は対面ならではの学会活動と言えると思います。北海道で体育学そしてスポーツ科学を探究し、知見を道内だけでなく道外にも普及させていく会員諸氏が直接情報交換できたことは、おそらく有意義な機会になったのではないかと思います。

さて視点を変えまして学会広報って他の学会や団体はどうしているのだろう、と最近ふと気になりました (Twitterを眺めていて病理医ヤンデル (札幌厚生病院の病理医) 先生のツイートを見ての気づきです。ご興味ある方は検索してみてください。まともなツイートは多くないのでおそらく苦笑いできます)。具体的には、学会というのが、会員の研究活動を促す機会創出としての側面があり、もう一つはその領域や分野の専門家集団として

の側面なんだろうと理解したところですが。前者には、本会ですと学会大会や機関誌があり、またこのニュースレターもそれに類すると思います。一方、後者の専門家集団という側面もおそらく重要ななんだろうと思います。本学会は専用のホームページを持って、学会大会の諸情報、役員会の議事録、機関誌に掲載された論文を掲載し、学会機能のうちの会員のための機能はそれなりに充実していると思います。ただ、専門家集団として、多くの一般の方や実践家としての体育教員やスポーツ指導者への橋渡しの活動も、何らかの形そしていずれは必要になるのかなと思った次第です。

運動やスポーツの取り組み方に関してもいろいろな情報がメディアに溢れており、中には誤情報やデマ・誤解を生むような内容もあり、それによって子どもや選手が不利益を受け、怪我や故障に繋がる危険もあるように感じています。そんなことが起きないよう専門的知見・根拠のある情報の発信も重要なのかなと思った広報委員2年目の終わりになります。

事務局より

塚本 未来（東海大学）

平素より北海道体育学会の活動にご理解とご協力を賜り御礼申し上げます。本学会幹事として事務局業務を担当しております塚本未来（東海大学）と申します。2022年度は新型コロナウイルスの収束の兆しがみえないなかでのスタートでしたが、これまでのオンライン形式を応用したなかで事務局業務を進めることができました。臨時総会は昨年度に続きメーリングリストによる審議となりました。また、今年度よりリニューアル開催された「第1回研究発表会2022」（オンライン形式）は、話題提供発表と業績としてカウントできる発表の二部門で構成され、会員の皆様には遠方からもご参加いただくことができました。さらに、第61回学会大会は、釧路大会（2019年度）ぶりの対面形式にて、通常の間頭発表・ポスター発表を実施することができました。発表の合間に他分野の先生方が交流する場面では、「学会大会」という雰囲気が戻ってきたと思いました。感染症対策のなか、ご参加い

ただきました皆様、会場担当の東海大学の先生方および学生の皆様には、ご協力を賜り心より深謝いたします。今年度の学会誌は学会大会・会場にてお渡しいたしましたが、ご参加できなかった皆様へは郵送させていただきます。まだ、お手元に学会誌が届いていない場合は、お手数ですが事務局までご連絡いただけますと幸いです。

2023年度本学会の活動計画として、5月中旬には「第2回研究発表会2023」が開催されます。また、平成22年より一時停止しておりました「研究助成事業」の募集が再開する予定です。最新情報につきましては、学会HP（<http://www.hspehss.jp>）やメーリングリストを活用してご連絡させていただきますので、ぜひご確認いただけますようお願い申し上げます。なお、第62回北海道体育学会の開催は、2023年12月中旬（担当大学：藤女子大学）に予定されております。

連載：リレーエッセイ

<新たな1年>

北翔大学 今 竜一

砂川市・美唄市・三笠市で計14年間、中学校の保健体育科教諭として勤め、今年度より北翔大学でお世話になっております。これまでの職場とは異なることが多い環境の中で、戸惑いながらも諸先生方に助けていただきながら大学教員1年目を終えようとしています。普段は主に保健体育科の教員養成に関わる講義を担当させていただき、現場経験を踏まえながらの指導はやり甲斐に併せてその責任の重さを感じる日々です。特に、ICT機器が児童・生徒に1台ずつ配備されてから間もなくして学校現場を後にしたため、その効果的な活用があまり実践できなかったことを背景に、ICTを用いた授業を受けていない学生たちにはどのような指導をしていくべきかを悩んでいるこの頃です。

さて、本学会には現職大学院生として岩教大に通っていた令和元年頃より参加させていただいております。平

成20年の大学卒業後、専ら教育に携わってきた私にとって研究の世界はまさに新たな第一歩でした。また、最近先生方にご指導を賜りながら一緒に研究をさせていただく中で、自身の力量不足を痛感する日々でもありません。しかしながら、専門外の領域を学ばせていただき、ご助言をいただくことで、研究もさることながら、学生への教育観も日に日に変わりつつあることに楽しみを覚えています。それと同時に、これまで私を学部生・院生としてご指導いただいた先生方には敬意の念しかありません。今後は研究と教育の両輪を大切にしたいと感じつつも、何分研究者として未熟者でありますので、先生方のご指導ご鞭撻を賜れると幸いです。どうぞ、よろしく願いいたします。

★★

編集後記

広報委員の任に着き、2年が経過しようとしています。会員の皆様におかれましては、コロナ禍3年となり、様々なところで、通常に戻す取り組みがなされています。完全な終息にはもはや至らないものの、日々免疫を高め、しっかりとした感染対策を施しながら生活していくしかないところです。

本学会においても第61回学会大会が完全対面で開催されました。新たに始まりました研究発表会はオンライン形式ではありますが、対面での質疑応答やその後のフロアでの交流など、やはり実のあるカタチであると感じつつ、オンラインのメリットも捨て難く、引き続き検討を重ねていく必要があると感じています。

前置きが長くなりましたが、広報としては、何と言っても会員数の減少が顕著であり、コロナ禍の影響もあろうかと思いますが、減少の一途であります。入会するメリット、学会大会や研究発表会の充実ももちろんであります。多くの研究者が帰属することの意義や意味を見出せる学会でありたいと思います。

本学会には、HPが唯一の情報発信手段であります。学会員一人ひとりのご活躍や口添えが何よりです。学部生や大学院生ももちろんですが、未入会の先生方、関係各位がいらっしゃいましたら、是非お声かけ頂き、お誘いいただけましたら幸いです。最後になりましたが、ニュースレターの発行、作成にご協力頂きました皆様に心より御礼申し上げます。

広報委員 永谷 稔 (北翔大学)

★★

ご多忙の中、原稿をお寄せいただいた先生方どうも有り難うございました。深く感謝申し上げます。

北海道体育学会ニュースレターNo. 14

令和5年3月14日発行

広報委員会委員長 森田 憲輝

是非ご覧下さい 北海道体育学会公式ホームページ <http://hspehss.jp/>